

第2回ESDティーチャー・フォローアップ研修会 概要報告

大西 浩明

- ◇日時 2026年7月21日(火) 19時～20時30分
- ◇方法 Zoomによるオンライン方式
- ◇参加者 18名

- ◇実践報告 奈良県立磯城野高等学校 吉田宏先生
「生き物調べから見えてきた『学びの意義の再発見』」

【実践概要】

磯城野高校・・・7つの学科 農業系は4学科（全校で約400名）

私は施設園芸科（施設野菜コース・施設草花コース）の教員

施設園芸科の課題・・・とにかく予算が少ない

→ 減農薬栽培、ポリポット・プラ鉢の再利用、鉢土の再生、ゴミの利用、廃業農家の資材譲受
結果的に「環境に優しい」につながる（ESDの実践）

教科「農業」の中に農業クラブ（プロジェクト）が位置づいている（部活動の側面もある）

このプロジェクトをめあてに入学する生徒、他コースから参加する生徒もいる

探究学習で教科の学習内容の深化を図るのが目的

農業クラブ プロジェクトチーム「Flowers」の活動

- 高齢者に駅前花壇の管理を手伝ってもらうことで高齢者の健康増進を目指す
- 駅前の町交流施設緑化を障害者とともにを行い障害者の社会参加を促す
コロナ禍によって、それまでやっていた花育活動ができなくなった
駅前の花壇を借り受けることになっていたのにそれもできなくなった
→ 高齢者に手伝ってもらって「福祉交流花壇」にすることを社会福祉協議会に提案
外出しなくなって筋力低下が危ぶまれる高齢者に動いてもらう
- 蝶で町の生物多様性をPRするためにバタフライガーデンを町内10カ所に設置
コロナ禍で構内での生き物調査をしていたら、あまりに多くの生き物がいることに驚く
→ もっといろんな人に知ってほしい
- よく来る蝶14種の簡単な図鑑を作成・配布
町内の幼稚園や小学校に呼びかける
→ 14種の蝶を確認できて子どもたちも大喜び
- ハウス食品の工場から出る廃棄麻袋の活用（防草シートの代用、袋栽培の利用）
「福祉交流花壇」でも活用
- ワキ製菓（株）のミミズ養殖場から出るミミズ糞の活用
プランターや鉢にミミズを入れて栽培実験 → ミミズを入れたところは発芽が早い
ミミズが地中を這う振動の影響かも？ 「振動による発芽促進の研究」
王寺工業高校との共同研究
成分分析を行い、土壌改良材を作成し販売 「ミミズふふふ〜んど」
現在は橿原市昆虫館から甲虫類の幼虫の糞をいただいて同様に販売している

○磯城野高校野生生物目録の作成

786 種記載 5 年間の調査を終え、奈良県環境森林部長に提出

○奈良県絶滅危惧種「ナガオカモノアラガイ」の県内最大の繁殖地を発見

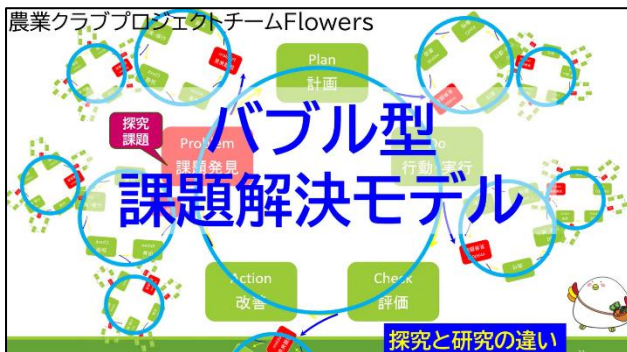
「ケショウオカモノアラガイ」(仮称) の発見

○生き物調べサポーターの活動、しきの生き物観察会の実施

○梅酒漬梅によるジャンボタニシの水稻被害抑制

⇒ これらの活動を町が認めてくれて「地域ケア推進会議」を設けてくれる

「緑の都市賞奨励賞」を学校単独で受賞 サステナブルアワード 2023 優秀賞



課題が次々生まれ、PDCA サイクルで回っている
まず最初は思いつき、「やりたいからやる」でいい
やっているうちに、
「どうせやるなら誰かの役に立ったらいいかな」
→ 地域課題・社会課題の解決につながる

課題を探してから何かをするのではなく、何かをしていたらそれがたまたま課題とつながっただけ
待ちの姿勢が大事 ゆっくり進む「各駅停車の探究」

直観力が高まっている

資格取得者の増加

- ・農業技術検定 3 級 (90%)
- ・アグリマイスター (ほぼ全員)
- ・進路選択の幅の広がり

将来の仕事を考える中で社会貢献や社会
変革を考える生徒も出てきた

農業クラブプロジェクトチームFlowers

課題発見バブル！ (現在、取り組んでいる他の主な課題)

- ・天然記念物知足院(正しくはそのクローンで)ナラノヤエザクラの挿し木繁殖(成功したら日本初)
- ・3倍体ヒガンバナの種子の稔性(常識を覆す発見例) *アンテナの感度がどんどん高くなっている。*
- ・奈良県絶滅危惧種ナガオカモノアラガイの生活史
- ・ケショウオカモノアラガイの発見(国内4例目)と生活史(校内なのでじっくりと観察ができる。)
- ・コハクオナジマイマイの越冬(国内初記録)「南紀生物」で発表
- ・ジャンボタニシの水稻被害抑制(廃棄物活用、効果有)
- ・シコクピエ(紀伊山地産)の系統保存と鶏飼料化(飼料コスト削減へ) ……

待ちの姿勢が大事
ゆっくり進んでいる。
「各駅停車の探究」

山森菜緒さん(卒業生: 現京都教育大学3 回生)のお話

高校入学後、プロジェクト活動と出会う

高校の中だけでなく、地域の子どもたちや高齢者などたくさんの人を巻き込んで活動している

「新しい発見」をすることは楽しい！

とりあえずやってみることが大切！

高校生の声が町を動かすきっかけにもなる！

熱中できるものがあると楽しい！

自分自身の変化、成長を実感する

- ・「どうすればうまくいくか」を常に考えるようになった
- ・勉強が楽しいと感じるようになった
- ・身近なことに疑問をもつようになった
- ・人前に立つことへの苦手意識がなくなった

卒業後も活動を継続できるように、Flowers の活動を支援する「Seeds」を結成

持続可能な活動にするために

大学生になった卒業生が共に活動してくれることは、大学での学びを高校生に授けてくれる

卒業したから「はい、おしまい」にならない 指導教員の負担減にもつながる

「Flowers がなくても学校は困らない」 しなくてもいい仕事

共に指導する仲間づくりが必要 教員志望者（ESD の仲間）が増えてきた

ESDを知らずにしていたが、ESDと出会い、ESDの視点で見ると
私も多くのことに気付くことができた。

「勉強はやらされるものではなく、『なんで？』と考えることで
『学ぶことは楽しい。』ということがわかった。」

今まで学んできたことが目の前の自然や社会の課題と結びついた瞬間、
学びは「学ばなければならない」から「学びたい」へと変わっていき、
その瞬間に立ち会える。

疑問を持ち、仮説を立て、試行錯誤しながら新しいやり方を試す
プロセスそのものが、実は生徒たちにとってかけがえのない「生きた学び」となっている、これを横にいて実感できる。

「学ぶことは楽しい」という言葉が聞けるのは、教師にとってのウェルビーイングである

「なんで？」と自然に思うこと
楽しいから学ぶ = 学びの意義

【質疑応答、意見交流】

- ・ 水稲も、元をたどれば中国から伝わってきた外来種と捉えることもできる。一言で「外来種」と言っても、いろいろあると思うが。

→ 外来種だからというだけでその命を奪うことはどうなのか。害がなければいいのでは。

ジャンボタニシの実践も、一部からは排除すべきと批判されている。

売っている花の中には外来種もたくさんあるが、それらは何も言われない。

ただ、生態系を変えるスピードを早めることは何とか止めたい。

- ・ ジャンボタニシを、とっては壁に投げつけている子どももいたが、それは教育者の立場から見ても指導すべきことではないかと思う。
- ・ カラスを呼んでジャンボタニシを食べてもらえないか研究中。
- ・ 農家にとっては、害虫を駆除するために農薬をまくことは致し方ないこと。ただ、生態系を大きく壊してまでも、どこまでそれを続けるのかはやはり考えなければいけないのではないか。
- ・ 高校では探究の時間がなかなか取りにくい。高校ならではの ESD とはどのようなものになればいいか？

→ 社会と具体的につながることはないだろうか。

経済や社会とのかかわりの中でどうしていくかを考えることもできるはず。

（中澤）社会参画、社会に役立つことができることが高校での探究であるべきかと思う。

- ・ 「〇〇できるようになった」ということは、そういう資質・能力が身についたということで、単に知識が身についたのとは大きく違うはず。山森さんがそれを体現しているのが素晴らしいと感じる。
- ・ 「教師は伴走者」というスタンスは、これからの教員のモデルであるべき。